

楽しかった在留外国人の日本語スピーチコンテスト

東京都港区のユネスコ協会が実施、草の根活動からの平和構築の有効性を実感

永野博 科学技術振興機構研究主幹

冷戦終結による平和の配当を喜んだのもつかの間、21世紀に入ると世界のさまざまな地域での紛争にかかわる報道は留まることを知らない。現在でも、シリア、イエメン、ウクライナ東部などでは現実の戦争が続いているし、わが国の周辺での安全保障の状況も予断を許さない。いったん近づいた世界の平和が、また遠のきつつあるようにも見える。

そんな中、「人の心の中に平和の砦（とりで）を」というユネスコ（国連教育科学文化機関）精神の実践として、私が会長を務める港ユネスコ協会（東京都港区）が12月1日に日本語スピーチコンテストを開催した。ささやかな催しではあるが、実に楽しく、大いに盛り上がった。このような地道な交流の積み重ねが、結果的にはユネスコの目指す平和の実現によい影響を与えていくのではないかと自信を深めることができたので、紹介したい。

国連の一機関であるユネスコは第二次大戦直後に誕生した。ユネスコ憲章の前文は、その冒頭で「戦争は人の心の中で生まれるものであるから、人の心の中に平和の砦をつくらなければならない」と謳い、さらに続けて「相互の風習と生活を知らないことは、人類の歴史を通じて世界の諸人民の間に疑惑と不信を起こした共通の原因であり、この疑惑と不信のために、諸人民の不一致があまりにもしばしば戦争となった」と続いている。戦争に負けた直後の日本人はこのユネスコ憲章の精神に感銘し、全国津々浦々から、ユネスコに加盟し、戦後の世界平和の構築に貢献したいという運動がほうはいとして起こった。このような各地の民間ユネスコ運動の盛り上がりが時の占領軍をも動かし、サンフランシスコ平和条約が発効するより前に国際機関であるユネスコへのわが国の加盟が実現するという快挙に結びついた。現在、日本全国には地域ユネスコ協会が270ほど存在し、港ユネスコ協会もその一つである。

12月1日の日本語スピーチコンテストは、わが国に滞在して日本語の習得に努力されている方々に来ていただき、日ごろ研鑽されている日本語の能力を発表していただく機会を作るとともに、日本人を含めた国籍の異なる人々が交流する場を作ろうというのがその趣旨である。

スピーチコンテストへの募集を始めたところ、早い段階で予定の10人を超えて12人の応募があった。出身国も、韓国、オーストラリア、台湾、フィリピン、ミャンマー、カンボジア、ネパール、タジキスタン、アフガニスタン、中国、米国など（二重国籍あり）さまざまであり、年齢も7歳からシニアまで、日本での滞在期間も2か月から10年まで多様性にあふれていた。

当日のスピーチは参加者の多様性を反映し、アニメーションの話から、日本や日本人に対する見方、さらにはわが国に滞在する外国人の行動に至るまで、バラ

主催：港ユネスコ協会 港区補助事業

第二回
日本語スピーチ
コンテスト

「テーマ」
日本って、どんな国
外国人が
感じたもの

見学者募集
本大会からご招待する見学者が必ずあります。
外国人企業や日本語学校など、ご協力いただき、ご参加ください。

日程：2018年
12月1日（土）
13:30-16:00

会場：
港区立生涯学習センター
101号室
〒108-8501 東京都港区南青山3-1-1

定員：20名（10名程度）
参加費：無料
お申し込み：12月10日（日）まで
お申し込み先：港ユネスコ協会
〒108-8501 東京都港区南青山3-1-1
TEL: 03-3434-2300 FAX: 03-3434-2233
E-MAIL: yuneko@portunesco.or.jp

協力：玉川大学ユネスコクラブ 慶応義塾大学ユネスコクラブ

エディに富んでいた。日本人が気づかなかった考察も多く、審査員はもちろんのこと、聴衆も身を乗り出して聞き漏らすまいとするようなスピーチが続いた。



最優秀賞のイエ・メーン・アウンさんにトロフィーを贈る筆者

審査の結果、最優秀賞には「元気が出るラーメンと自分で考えさせる日本語」というテーマで話したミャンマーのイエ・メーン・アウンさん（学生の部）が輝いた。滞在7か月でありながら、日本に来て強く感じた二つのこと、一つはミャンマーの料理の味と共通するラーメンについて、もう一つは、仕事でミスをしたときに日本人に必ず聞かれる「なぜ？」ということについて、思いを論理展開していたことが評価された。

最優秀賞に次ぐ港ユネスコ協会会長賞は「日本人は自分たちの為にももっと自己主張しませんか」というテーマで話したフィリピンのサントス・マリア・ルーデスさん（成人の部）が受賞した。日本の医療制度を悪用する外国人がいることを指摘しつつ、日本政府がきちんとした対策をとるべきことを指摘した政策提言型の内容であった。

審査員特別賞は「さいごの日本 ドラえもん」というテーマで話したオーストラリアのクリフ・ユーン君が獲得した。ドラえもんよりクレヨンしんちゃんに似ていると家族に言われるクリフ君は、ユーモアたっぷりに、日本、韓国、オーストラリアの何が好きかを話し、聴衆の喝采をあびていた。



日本語スピーチコンテストの入賞者たち。左からクリフ・ユーン君、イエ・メーン・アウンさん、サントス・マリア・ルーデスさん

スピーチ終了後は、審査結果が出るまでの時間を活用して、スピーカーと会場にいる方々との間での交流会を催した。このセッションは前回、思いのほかに盛り上がり評判もよかったため今回も企画した。交流会の全体のファシリテーションを玉川大学ユネスコクラブの小林亮教授にお願いし、小林教授の指導の下に慶應義塾大学ユネスコクラブの学生がファシリテーターとして参加した。



スピーカーと聴衆の交流会

全体を四つのグループにわけ、それぞれにスピーカーが3人、聴衆が10人程度ずつ、それにファシリテーターの学生が一人ずつ入るといった形をとった。どのテーブルでもスピーカーの話題からスタートし、その後、和気あいあいと話が大いに盛り上がった。日本では、日本人と複数の外国籍の人が初対面でグループを組んでも、話の盛り上げ方が難しいことが多いが、共通の話題を作りやすいという

状況設定とファシリテーションさえ上手に行えば、大きな困難はないということがわかる。

冒頭に紹介したようにユネスコ憲章はその前文で、諸国民が相互に風習と生活を知らないことがこれまで不幸な戦争をしばしば引き起こしてきたと記しているが、こうした草の根的な活動が確かに戦争予防につながると実感したコンテストだった。ドイツとフランスは第二次大戦後、八百万人に上る若い人の交流を進めてきたと言われている。世界平和の実現は巨額の軍事費を投入するよりも、人々

の間のコミュニケーションの場を作る方がずっと安上がりで、確実なのではないだろうか。

掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。
Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.